

はじめに

本号は、昨年度のスポーツ科学研究室の研究活動の成果である。

昨年度に引き続いて「グローバリゼーション」をサブタイトルに掲げた。『研究年報』の名称の時代から通算すれば6度目のこととなる。

月例研究会や合宿研究会での発表と討議、関連領域の研究者を招いてのゲスト研究会、それらのまとめの作業などの回数を重ねることで、「スポーツとグローバリゼーション」というテーマに対する私たちの理解は深まったと同時に、このテーマが一筋縄ではいかないものであることを再認識することとなった。

グローバリゼーションの進展によって、さまざまな境界が曖昧化、ないしは消滅し（ボーダーレス化）、人、資本、情報などあらゆるものが自由に瞬時に移動する時代状況が生み出された。ここに至って、「国家」は「想像の共同体」そのものとなるという言説も成り立ち得るものであった。しかし、ごく最近のものでいえば、サッカー・アジアカップ（とくに、決勝戦）やアテネ・オリンピック大会といったスポーツイベントをめぐる諸事象を見ると、「国家」（これも多義的であるが「ナショナリズム」も）は厳然と存在していることに否が応でも気づかされる。前者において、在中国日本大使館から「サッカー・アジアカップの決勝戦に関連したご注意（緊急）(04.08.05)」が発せられることに象徴される事態には、歴史社会的背景とともに今という時代において生起している諸要因が折り重なっている。この事態を読み解いていくという一点からだけでも研究上の課題は尽きることはないといえよう。

このように、「スポーツとグローバリゼーション」が示す問題領域は限りなく広く、どこか茫漠たるものがあり、そこに対するとき、とまどいにも似た思いすら抱く。しかし、私たちは同じ場に立ち止まっていたわけではない。昨年度までの研究活動の蓄積をもとに、新たな探求をはかってきた。その思いが正当なものであるのかについて、ここに収められた各論文や研究ノートをご覧になった方々にご判断いただき、忌憚のないご意見をお寄せいただくことを願うものである。

前号では冊子のタイトルの変更と論文の欧文表記の新設を行ったが、今回は、一見されてお分かりのように装丁のデザインを一新した。この点については「あとがき」もご覧いただくこととしたいが、「餅は餅屋」という常套句を実感させる仕上がりとなった。

2004年9月17日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 尾崎 正峰